「地域のマツを守るために」～松くい虫防除体制をつくる～

宮城県気仙沼地方振興事務所　唐澤　悟　○皆川　豊

1　まえがき（はじめに）

先ず始めに，私たちが受け持っている「気仙沼普及指導区の概要」について説明します。

当普及指導区は，宮城県の最北部，沿岸地域に位置し，気仙沼市・志津川町・津山町・本吉町・唐桑町・歌津町の１市５町で構成され，気仙沼・本吉地域と呼ばれています。区域面積は約５万７千ｈａで，民有林と国有林とを合わせた全森林面積は，約４万２千ｈａで，この内，民有林面積は，約３万６千ｈａです。

なお，当普及指導区では，岩手県に接しているので，山間部においては，素性のよい南部アカマツ系のマツ林が多く，また，沿岸部においては，地域住民の生活を守る「防災林」や南三陸国定公園の景観を織りなす「風致林」として，クロマツを主体とするマツ林が多いことから，マツ林が，民有林全体の約２０％を占めています。

以上のような概要を踏まえまして，当普及指導区の特徴を次のように整理しました。

○当普及指導区は，岩手県に接する本県最北部の三陸沿岸地域に位置している。
○沿岸部のマツ林は，地域の景観と生活環境に，また，山間部のマツ林は，貴重な木質資源として，地域の産業にそれぞれ多大な恩恵をもたらしている。

ところが，ここに大きな問題が，顕在化し始めています。

すなわち，発生当初は，低水準において微増傾向を示していた松くい虫の被害が，近年，急激な増加傾向を示しているのです。

ここで，県内の松くい虫の被害量の推移を示しますと，図１のようなグラフとなります。

このように，県全体の被害量は，平成８年度の，約２万９千立方メートルのピーク時まで増加し，その後，平成１２年度までは，減少傾向を示しましたが，その後は，再び増加傾向にあり，平成１５年度現在，約２万３千立方メートルとなっています。

気仙沼普及指導区，すなわち，気仙沼管内の被害量は，平成１５年度現在，石巻・仙台・大河原の各管内に続いて，４番目に被害の多い地域と言えます。

さらに，気仙沼管内の被害の推移に注目してみると，図２のようなグラフが示されます。

昭和５２年度に，志津川町で初めて確認されて以来，低水準において，微増傾向を示していた被害が，平成９年度から急激に増加しました。

この平成９年度には，気仙沼市において，対前年比で２倍弱，また，歌津町では２．５倍に被害が急増しました。さらに，唐桑町においては，昭和５４年度以来１８年ぶりに被害が再発してしまいました。以来，平成１１年度には，一時的に被害は減少しましたが，翌平成１２年度には，急反発し，猛烈な勢いで増加し始め，平成１５年度には，被害が２千立方メートルを超えてしまいました。

このような，松くい虫の被害の状況を踏まえ，当気仙沼普及指導区では，次のように普及指導に取り組んでいくことにしました。

2　研究方法

先ず，「発生初期の被害の拡大が，比較的穏やかであったため，松くい虫被害，正式には，マツ材線虫病と言いますが，この伝染病について正確に認識されていなかったのではないか？」と推測し，このことを「問題点」と位置づけました。

一般に，病虫害の防除の原点は，被害発生のメカニズムや，被害の特徴を正確にしっかりと認識した上で，これに基づく，防除技術を体得することであると考えられます。

また，このような基本的な事項を忠実に実行することが，最大の防除効果を発揮するものと考えました。

つまり，「防除の原点」が「最大の防除効果」を生み出す，必要・十分条件であるといえます。

このような考えの下，基本的かつ正確な認識と，確かな技術に基づいた松くい虫被害の防除体制をつくることを，「問題点」から導き出される「普及の課題」としました。

それでは，具体的な普及活動について，紹介します。

（1）実施主体等への普及活動

林業普及指導活動計画に基づき，平成１３年度に松くい虫被害対策等について検討を行うため「地域重点課題普及推進会議」設置しました。

この会議において，松くい虫被害対策の実施主体であり，中枢をなしている市町の担当者を中心に，森林組合の担当者，並びに指導林家等を対象とした，松くい虫防除研修会を開催し，松くい虫被害のメカニズム等，基本的事項を研修すると共に，現在，林業試験場で開発が進められている，被害の特徴を踏まえた，ポンチを用いた枯損木判定法について現地にて検討し，原点を意識した防除体制を作り上げるきっかけとしました。

（2）防除の担い手への普及活動

気仙沼市と唐桑町における防除の主な担い手である気仙沼市森林組合においては，中堅及び，若手の作業班員とベテランの作業班員との間で，技術・知識ついての格差が生じていました。

すなわち，ベテランの作業班員は，被害発生初期に，駆除のメカニズムを十分理解した上で，伐倒駆除の技術を体得していたので，ビニール被覆による薬剤くん蒸処理もくん蒸の仕組みを意識した施工ができているのですが，若手及び中堅の一部においては，駆除のメカニズムが認識されないまま施工している場面がみられたので，このような現地研修会を開催し，防除の効果が最大となるよう基本的な認識を深めると共に，技術の再習得を行いました。

（3）地域住民等への普及活動

地域住民や児童に対して，被害に対する関心と，認識が得られるように，「気仙沼・本吉地方産業まつり」において，「松くい虫の被害はなぜ起こるのか？」と題したパネルとともに，松くい虫被害を引き起こす，「マツノザイセンチュウ」の顕微鏡による実体視について，出展しました。

来場者の被害に対する関心は，当初予想していたよりも高く，「マツノザイセンチュウ」

を実際に目の当たりにし，その小ささとグロテスクさ，さらには「マツノマダラカミキリ」との共生関係に驚くと共に，被害防除の難しさを実感してもらえたようで，松くい虫被害について，考える機会を提供できたものと思われました。

（4）地域の中学生への普及

本吉町立大谷中学校の２年生３８人を対象に，松枯れ被害の現地見学会が，地域の松枯れ問題に取り組んでいるボランティア団体である松枯れ予防ネットワーク本吉の主催により，宮城北部森林管理署気仙沼森林事務所，本吉町農林畜産課，本吉町森林組合，並びに，当気仙沼地方振興事務所の協力の下，開催されました。

この見学会において，私たちは，林業試験場が作成したチラシを加工し，配布して，被害の発生メカニズムと，マツノザイセンチュウとマツノマダラカミキリの共生関係を説明し，防除の難しさと中学生の自分たちに何ができるか考えてもらいたいと，投げかけを行いました。

また，感染後，駆除されることなく白骨状になった被害木の密集地と，伐倒駆除の現場とを連続して見学したので，被害のすさまじさと危険を伴う防除の困難さが，実感されたようでした。

なお，この様子は，昨年，地元新聞の朝刊等にも掲載されました。対象となった中学生はもとより，地域住民の関心を引く新たな機会になればと思います。

この見学会がきっかけとなり，近々、同校の生徒たちによる松林での清掃活動やアカゲラ（キツツキ）の巣箱設置が計画されています。

３　結果及び考察

以上のような普及活動から得られた，成果と課題について，考えてみました。

○実施主体と担い手については，被害の仕組みを理解した上での効果的な施工を意識した防除体制が，徐々にではあるができあがりつつあると思われます。

しかし，松くい虫の被害は，防除の手を一旦緩めてしまうと瞬く間に被害が拡大し，それまでの努力が全て無駄となってしまう恐ろしい病害なので，できあがる防除体制の恒久化が不可欠であり，そのためには，継続的な普及活動を行っていくことが重要であると考えます。

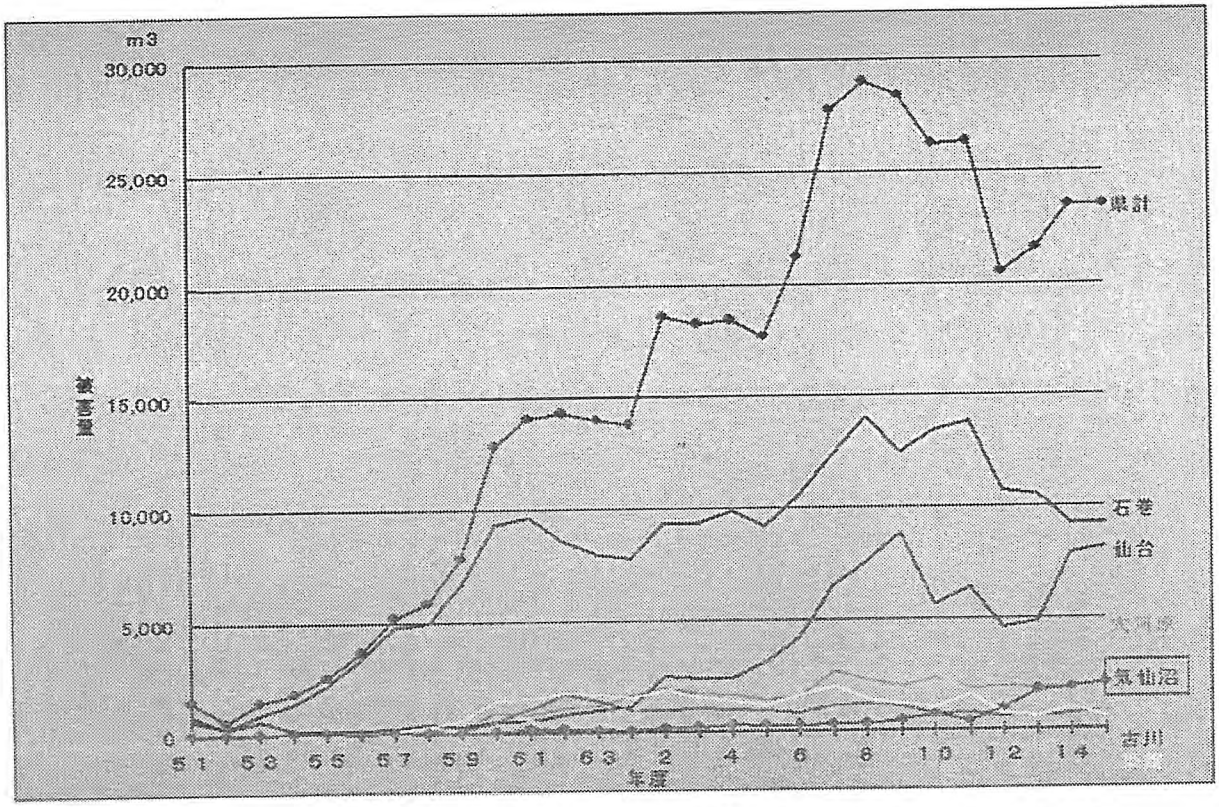
○地域住民や地域の学校等については，動き始めた自発的活動への更なる支援と新たな動きを発掘していくことが必要であると考えます。

４　まとめ

正確な認識が松くい虫防除の原点であり，また，最大の効果をもたらし，そして，防除の原点を踏まえた上で，実施主体，担い手，地域住民等が一体となった更なる防除体制の整備が必要となると考えます。

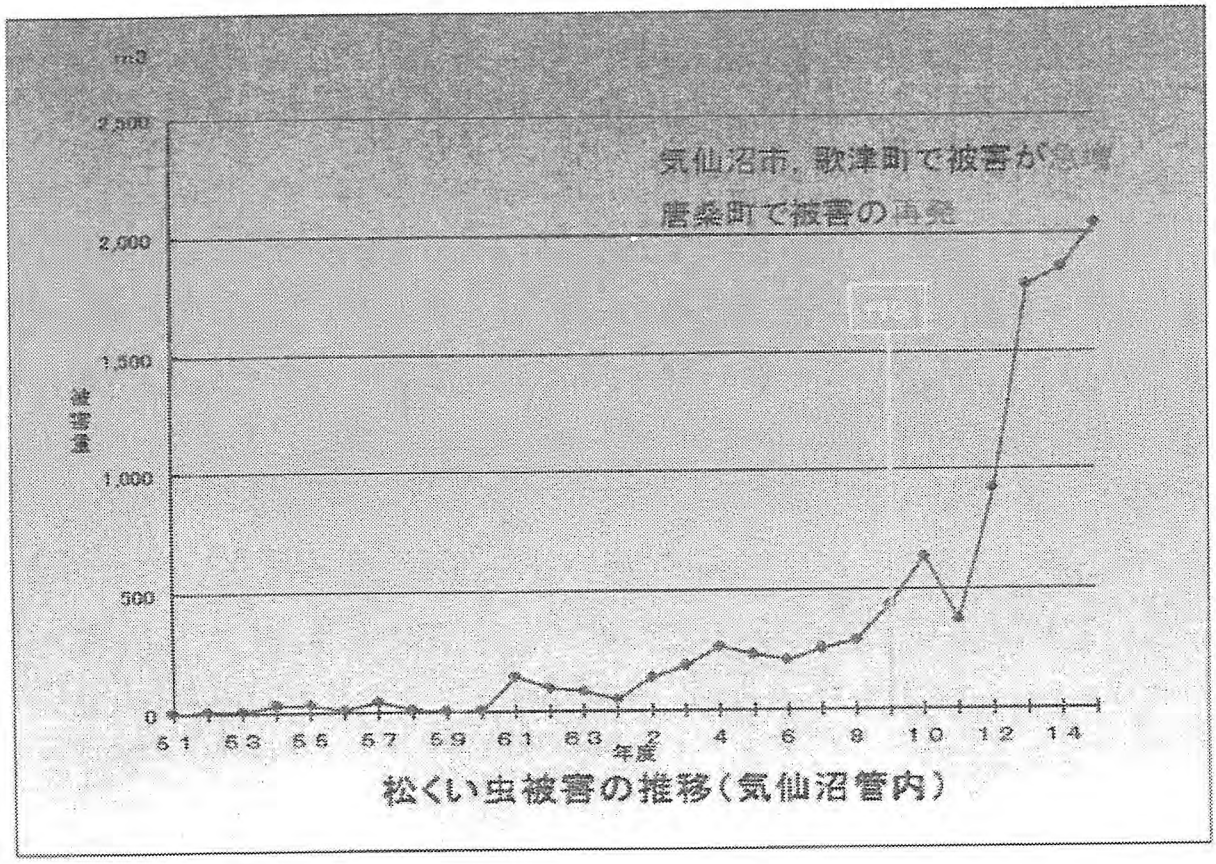
そのための普及の役割は，知識と技術の伝達をも含んだ地域全体のコーディネーターとなることであると考えますので，このことを念頭において，今後も活動していきたいと思います。

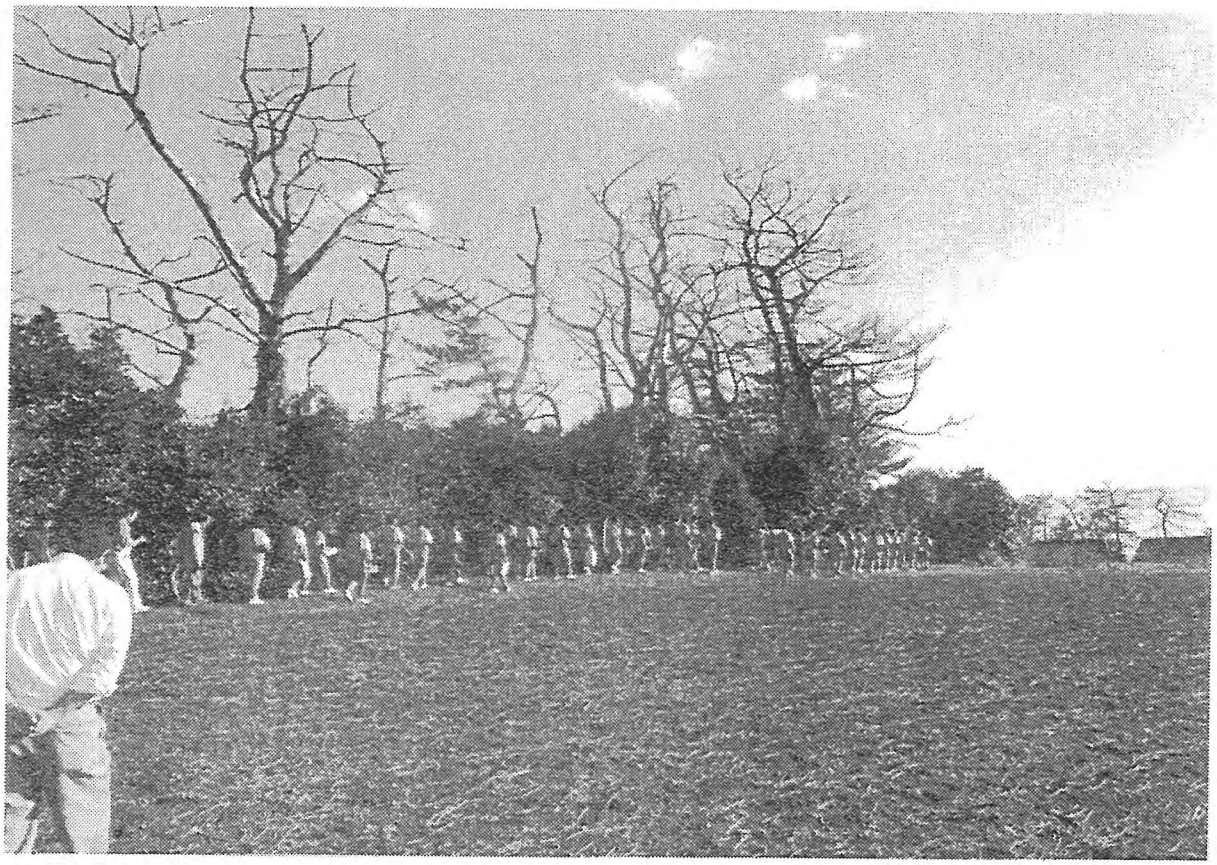
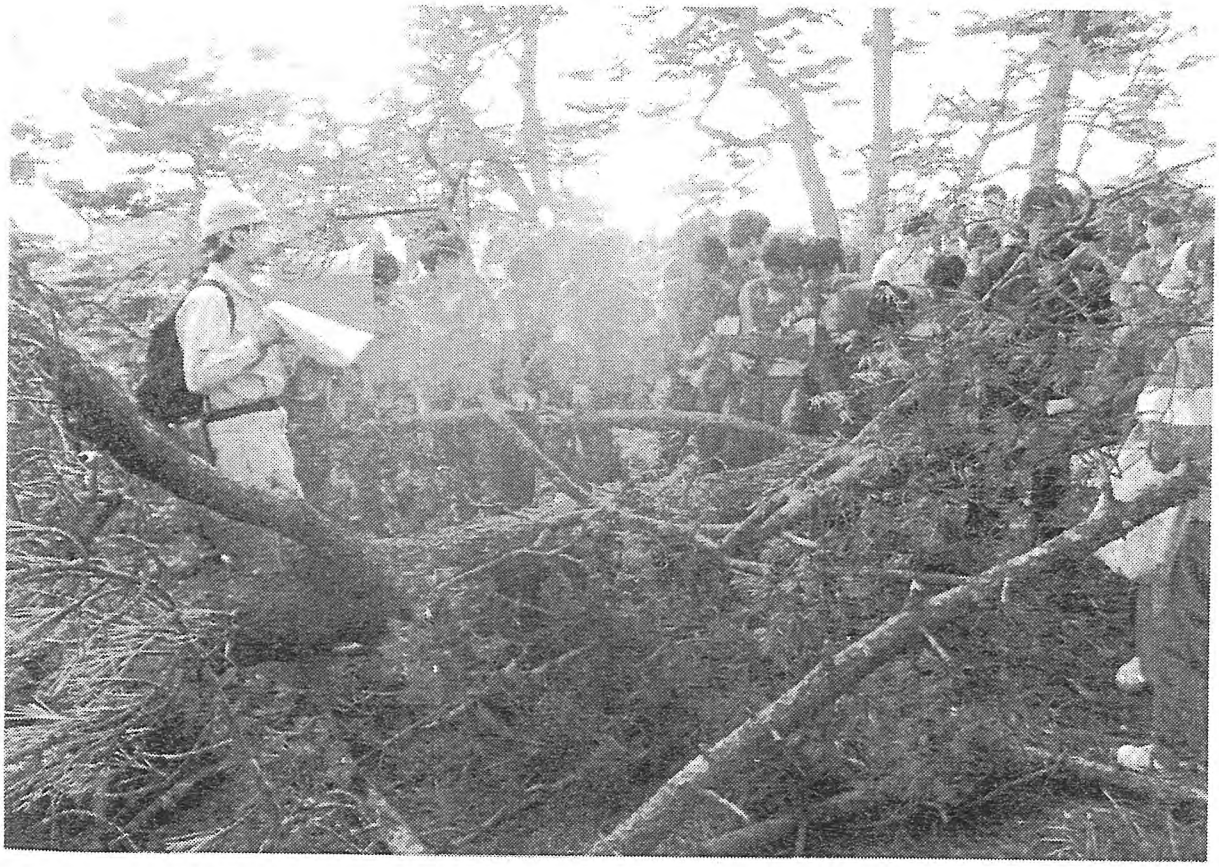
図1



松くい虫被害の推移（管内別）

図2





本吉町立大谷中学校での現地見学会